

---

# マリアナ物語

hapy

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マリアナ物語

### 【著者名】

happy

N1032D

### 【あらすじ】

聖マリアナ女学院に入学した夢河杏南の学園物語です。

「「」きげんよう、皆わん」  
でた。お決まりの決まり文句。この学校入つて1週間経つけどこの  
挨拶には全然慣れないと。

理事長に佩こいつとおじぎすると、私はすたすたと教室に向かつた。  
ここは東京白金セレブの街にでんと校舎をかまえる私立聖マリアナ  
女学院。偏差値70の進学校でありながら、究極のお嬢様学校だ。  
そんな学校に通つていて、毎日を地味に過しているのが私、夢河杏  
南高1である。勉強とスポーツだけは得意で、一応授業料免除の特  
待生。でなきや、こんな名門校通つてない。

私は中学までずっと公立で、こいついうお嬢様系はまったくだめ。だ  
から、話も合わないし、友達は少ない。そんな私が何でこの学校に  
入つたかつていうと・・・。すばり！ 東大に入るためである。この  
学校は東大進学率が、日本の高校の中で日本1なのだ。私には、東  
大に入つて、経済を学んで、大会社を築くという夢がある。その夢  
を叶える第1歩として、この学校に入つたのだ。

つと、こんな事考えてる場合じやなかつた。教室いこつ  
がら、教室に入る。

「夢河さん。ごきげんよう！」

はあ、でたでた。学校1のお嬢様、理事長の娘で、帰国子女。有革  
奈絢乃。少しウエーブのかかった長ーい髪に、おにんぎょさんの様  
な顔立ち。頭脳明晰、スポーツ万能なんだから、ほかにはいない究  
極のお嬢様ね。

「「」、ごきげんよう。有革奈さん。早いのね。」

「今日は早朝生徒会があつたから。」

「そう。ご苦労様。」

そういうて、私席に着く。はあ。朝からきついな・・・。

「朝から暗い顔してますわね。杏南さん。絢乃のこと、苦手です

の？」「

隣から声がした。うわっ、いたんだ文富佳音。びくつたー。

文富佳音は一言で言うと大和撫子。しかも親は華道の家元に日本舞踊の師範って言うんだから、凄い人。頭も有革奈より良い。

「う、ごきげんよう・・・、文富さん。まあね。ああいうタイプは苦手なんだ・・・。」

「絢乃は幼稚園時代から一緒にすけど、悪い人じゃありませんわよ。ただ、ちょっと人懐っこ過ぎるんですわよねえ・・・。」

一人でため息ついてるよ。はあ、全然ついていけないわよお。もう、早く卒業したい！

ちりりりりりりりりりん。授業開始のチャイムが鳴った。あれ？もうそんなに時間たつたんだ。

教科書やノートを机の上に出して、鞄を机の横にかける。ちょうどそのとき、通称マドンナ先生が入ってきた。

ふん。先生の授業中の仕事はテキスト配つて時間を気にしてるだけだしょ。後、分からぬとこだけ解説もらつて、授業終了。塾と一緒に。

はあ、今日のテキストの説明だ。なにに・・・。ふーんそういう解き方ね。分かった。

・・・1時間後。

「今日の授業終了。終わんなかつた人は、明日までにやつてきてね。

」

先生が出て行く。何言ってんのよ先生。特別選抜クラスの私たちがあんな簡単なテキスト、1時間の間に終わらせなかつたと思う？45分もあれば、楽々終わるわよ！

文富佳音も同じ事考えてたみたいで・・・。

「全く。馬鹿にしないでいただきたいわ。あんな問題1時かかからないですわよ。30分で十分ですわ！」

えつ30分？私30分じゃ無理かも。さすが大和撫子・・・。あ、有革奈が来た・・・。

「ねね、佳音。さっきのテキスト、簡単だつたわねー。先生も、もつとましな問題なかつたのかしら。」

「絢乃もそう思います？あんな問題、中等科の生徒でも、解けてしまつ子いますわよ。」

「そうよねー。ああ、つまんない・・・。」

ええーー。じゃ、聖マリアナの中等科生つてそんな頭いい人いるの！？ひえーーー。

はあ、この先、私の高校生活はどうなつてしまつんぢろ？・・・。

- 1 - (後書き)

小学生の私が書いた、生意気な物語ですが、これから宜しくお願いします。

5月・・・私がこの学校に入学して、もう一ヶ月経った。『きげん よひの挨拶にも少し慣れてきた。

「夢河さん。ちょっと良いかな？」

放課後、有革奈に呼び止められた。

「え・・・べ、別に良いけど。」

な、何なのよ・・・。女のいじめだつたら最悪だよお・・・。怖い

――。

「あの人あ。。。何なの一体。」

「えっとね、今日から夢河さんのこと、杏南って呼んでも良いかしら?」

は?な、何だそんな事だったのよ。ああ、良かつた。

「構わないけど?」

ぱあ。有革奈の顔が明るくなる。

「本当に?嬉しい。じゃ、これからは、私のことも絢乃つて呼んで

!お願い!!」

ええええ。あなたの」と?ま、いつか・・・。

「いいよ。絢乃さん」

「嬉しい・・・。ありがとう!杏南さん!」

あ、行つちやつた・・・。何だつたの。

それから1週間は、時々絢乃と話した。意外と親しみがもてたから、ちょっとほつとしたかな。

でも問題は、文富佳音のほうで・・・。

「良かつたですわね。苦手が克服できて・・・。」

とか何とか言って、いつの間にか後ろに居るので。怖いよ・・・。

「ただいまー。」

たつたつたつたつたつ！

お帰りなさいおねーちゃん

ただいまあ。杏歌、良い子してた？」  
ももか

「お母さん。お父さん。ただいま。」

うちのお母さんとお父さんは1年前に交通事故で亡くなつた。私がこの家の大黒柱なの。つていつても、いまは優しいおじいちゃんが私たちを引き取つて、育ててくれるの。あ、後もう1人はどこだ！

「あ、なーい！ お帰つねーああ

この子は私の弟杏泰、  
小学校3年生。

この子は私の弟杏泰、小学校3年生。  
この子も私の宝物。  
で、かつて良くて、気が利くからね。  
姉妹思い

「今日は何があった？」

「カヌエで1000歳まで生きられたよ！」

「お友達とかくわんほしたよ！」  
杏はねえ

お母さんもお父さんも居ないけど、寂しくないのか、この子達のお

かけかな。  
ありがとう。

翌日、午後の授業のちょっと前。絢乃がしゃべりにきた。

杏南！今日の小テスト、簡単そうだよね。

がら、先生だ。あわてて、席に戻つてくる。

アストギタル ニンニン .. .. .. よし簡単なこれ

10分後 カタシ あ 総刀も出来たんだ 提出して  
カタン。あ、文宣だ。す、河か提出の仕方も奇麗。つて見とれてる

場合か？席もどりやつと。

テストが返ってきた。よしひ 100点だ！ ちらつ、文富のテスト用

紙が見える。97点。あ、計算ミスだ。私も良くならんだよーっ  
て、あれ? 何か、手が震えてるよーな・・・?

6月・・・、あの「テストの日から、色々文富から聞き出せりつとしたけど、何か近寄りがたい雰囲気が以前よりも増えた気がして・・・。何なんだろう?あの手の震え・・・。

帰りのホームルーム。何か、文富から話があるらしい。

「皆さん今までありがとうございました。私は明日から、パリに留学することになりました。私は明日から、パリに留学することになりました。私は明日から、パリに留学いたしますわ。」

えつ・・・。そうなの?じゃ今日聞かなくちゃいけないんじやない。よしつ!

「起立、礼」

ふー終わった。よーし!

「文富さん、ちよつといい?」

「は?え、ええ、何ですか?」

「あのや、1ヶ月くらい前の、数学の小テスト返された時、手が震えてるよつに見えたんだけど、私の気のせいかな。」

あ、明らかに動搖してるよーーー。手震えあり!

「あ、え、そ、それは・・・。」

あ、よーーーし!

「今回の留学と何か関係ある?..」

「・・・」

黙つたままとか、卑怯じやん!ー聞き込みだあ!

「何で黙つてるの?」

「・・・」

「何がまざい?聞かれちゃ?」

「・・・」

ああーーーーもつ、うわつたいなあ!

「ねえ、なんか言つてよーじれつたいんだけどーーー」

あ、口開いた！

「じ、実は・・・。」

なになにナーナー？

「ここではちよつと・・・。裏庭に・・・行けません？」

ああ、ちょっと氣が抜ける——。まいいや。聞けるんだし。

「いいよ、いい。」

よーし、よいよだ！

「今回の、留学は、私が望んだんじやありませんの・・・。」

「うんうん。で？」

「しかし、母と父が、勝手に話を進めまして・・・。」

「うんうん！」

「私は、嫌だと言いましたわ。そうしたら、『これからは、日本の事意外もしつかり学ばねばな。』って・・・。」

「ふーん・・・。で？」

「私は、将来の文富家の跡取りとして、しつかり学びたいのは、日本のことなんですね。」

うわつなんかいきなり力入っちゃつてるけど・・・。まいいや続き続き

「それで、今度のテストで、100点採れなかつたら、留学と・・・。」

「決まつちゃつたんだ・・・。」

「ええ、そういうことなんですね・・・。」

やつた――――すつきり。問題解決う。ああ、よかつた。

「さようなら、夢河さん。また、いつか会いましょう。と言つても、卒業までには戻つてきますけれどね・・・。」

にこつと笑つて行つちゃつたよ・・・。なんか急に寂しくなつちゃつたよ・・・。自分が楽しんでたのが馬鹿みたい。・・・。・・・。

一個問題は解決したけど、これから先、何か問題待つていそうな雰囲気・・・。

7月・・・。文富が留学して行つて1ヶ月たつた。それから1つ変わつたことは、文富と前より仲良くなつたこと。手紙を交換したりしていること。離れてしまつたからこそその事なのかなあつて、いつも思うよつになつたよ・・・。

しかし、お金持ちは大変なんだなあ。行きたくもない留学させられてさあ。私なんか、留学したいとは思わないけど、奇跡が起きない限りこんな事は起きないんだろうなあ・・・。

は、やは授業中なのは考え方してた  
あーんとこじよー<sup>トコジヨー</sup>！  
！テキスト終わらないよう！！急げ急げ！

キーンゴーンカーンゴーン・・・・・まあ、さりさり終わつたあー  
よかつたあ、ふう。

「これでおしまい、礼。」

ふいふいひひひ。おわった。

「うんほんと。終わつたあ。」

紅刀とは本當は何良くなつて  
なんと家まで入れてもらつたがほと  
やつたあ。イエイイエイ！！

「はあ、なんか佳音がいないと寂しくない?」

前は、友達なんて思つてなかつたけれど、いざいなくなつて、手紙

。 交換したりすると ほんと寂しいって感じるなあ いいいい時

一ね、今度、儘童のところに行つてみない?」

「パーティーがあるの。圭音の留学記念で。屋一十

きまじゅみ。みづみ。」  
の。そこは、佳音のお友達なら誰でも行って良このみ。みづみ。行

え、あ、うん。せひ行かせてもらうー！」

「わかつたわ、ちなみにドレスコードは、「着飾り」ねつ！ちゃんとしたドレスを着ていかなくちゃだめなの。着物でも良いんだけれどね。」

うつや、ドレスなんて、持つてないですかねねね。があああああん。

正直に詮ねり

「あの、ね、ドレスとか、持つてないの……。」

「あ、そうなの！じゃ、私の貸してあげる！似合いそうなの、いつ

はい打てるから！」

で、ついに今日に至つた・・・。今いるのはちょーでかい絢乃のお家。

## ピーンポン

「ハイ、お待たせいたしました。どちら様でしょう？」

なんか知らない人の声！緊張！！

「あ、絢乃さんと同じクラスの……ゆ、夢河ですっ！」

「あ、お嬢様のお友達ですね、少々お待ち下さいまし。

前は杏南が出てくれたんだナビ……。今のはメイドを

たい。それにしても、お嬢様って呼ばれてるってすうじいかも……。  
きき――――――。

「いらっしゃい、杏南！さ、入つて！」

「あ、うん。おじぎしてねーす。」

2回目だ。家に入る。

「あれ？この前連れて来れた。オチビちゃんは？」

「ああ、妹と弟なら、おじいちゃんが見てくれてる。友達は大切にしなさいって出してくれたの。」

「そりなんだ。ふふ、いいおじいちゃんね。」

「ありがとう。おじいちゃん喜ぶわ。」

はあ、いつ言つた会話つて、家じやあんまりないからな。楽しけ！

「私の部屋い」

「うん。」

「早紀姉さん！お茶お願ひね。」

「分かつたよー。お嬢様。今すぐ！」

タントンタントン階段を上る。

「早紀姉さんつて誰？」

「メイドさん。赤和早紀つて名前の25歳なの。メイドさんなんて呼ぶのいやだから、姉さんつて呼んでるの、それに私、1人っ子だからや。」

「ふうん……。そりなんだ。」

こんな色々話してたら1時間たつて、いま、やつと、部屋のクローゼットに向かっていくところ。

「好きなドレス選んで！あ、私のはこれね！」

うわあ、可愛い！赤のワンピに黒リボン、黒の七分丈ボレロが本当に合つてる。

「すいーーーー。可愛いね！私も選んでいいの？本当に」

「良いよーーー。わわ、えらぼ。私も手伝つよ。」

「うん」

でも・・・・。10着くらいある。「ーーーーーん・・・・。あ、あの

白いやつー

「よこつしょつと・・・・。」

「あ、それ可愛いよ。似合つと思つて、真ん中おこごとて正解つど。」

「おみとーしだつたの。」

「ううん。ただ私も好きだから。」

へえ。そりなんだ。でもこれ、ノースリーブの、薄手だからなあ。こんだけじや、いくら夏だつて、寒いわ。なんかはあるものを・・・

「ね、そういうボレロみたいなのがある?」「あ、うう、あるだ。いつの時代?」

一分立して、……。あるよ、など待てて！」

「うとうせえ。」

「お待たせえ  
ござ  
それは哈いそーなの選んできたわ  
ちりごこう。

どれにしよう・・・。5着・・・。迷うなあ。あ、これ、なんかこの薄いピンクの可愛い。

「決めたあ。ありがとうね！」

「ねえ、それあげるよ?」

そんなことないよ  
それは まだ一 緒はハリテイに行けるよ

「…………本当に良いの?」

卷之二

「…………。ありがとう。うれしいよ——。」

「早く、着よう！パー ティーあと1時間で、始まるよ。」  
「あ、うん！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1032d/>

---

マリアナ物語

2010年11月20日15時18分発行